

# 博士学位論文要旨集

内容の要旨および審査の結果の要旨

第 29 集

2026（令和 8）年 3 月

二松学舎大学

## はしがき

この冊子は、学位規則（昭和 28 年 4 月 1 日文部省令第 9 号）第 8 条の規程による公表を目的として、2025（令和 7）年度に本学において博士の学位を授与した者の、論文内容の要旨及び論文審査結果の要旨を収録したものである。

## 目 次

学位の種類等	学位番号	氏 名	学 位 論 文 題 目	頁
博士（文学）	甲 72 号	江 楠	融合と再構築—近代日本における知識人の「中国像」—芥川龍之介、谷崎潤一郎を中心に—	1
博士（文学）	甲 73 号	宋 迪	太宰治文学の戦中戦後——人物像の再定位を中心に	9

## 博士学位論文審査報告

題 目	融合と再構築——近代日本における知識人の「中国像」——芥川龍之介、谷崎潤一郎を中心に		
氏 名	文学研究科 国文学専攻 江 楠		
論文審査委員	主査	二松学舎大学大学院文学研究科教授	江藤 茂博
	副査	二松学舎大学大学院文学研究科教授	山口 直孝
	副査	二松学舎大学大学院文学研究科教授	五井 信
	副査	二松学舎大学大学院文学研究科教授	牧角 悦子

### 論文目次と内容の要旨

本論文は、芥川龍之介、谷崎潤一郎の中国を描いた紀行や小説を対象として、中国への旅行とその言語化を通じて二人の知識人の認識がいかに関わり、表現を変容させていったかを考察したものである。序論、第一章～第九章、結論の全十一章から成り、目次は下記の通りである。

#### 序論

- 一 問題提起
- 二 先行研究
- 三 研究方法
- 四 論文の構成
- 五 研究目的

#### 第I部 芥川龍之介の中国体験と中国像

はじめに

#### 第一章 芥川の中国旅行と『支那遊記』への評価

#### 第二章 「魔都」上海の表象と芥川的第一印象

はじめに

- 一 大正期の上海
- 二 上海における「第一瞥」
- 三 上海における「西洋」
- 四 中国知識人との談話

おわりに

### 第三章 江南体験と英雄像の変容——「首が落ちた話」「江南游記」「湖南の扇」を軸に

はじめに

- 一 理想化された「英雄」像——「首が落ちた話」を中心に
- 二 脱神話化のリアリズム——「江南游記」における『水滸伝』豪傑の再解釈
- 三 反英雄の誕生——「湖南の扇」における革命家像の完成

おわりに

### 第四章 「長江游記」における下層階級の表象——「苦力」をめぐる視線の分析

はじめに

- 一 長江で見た植民地主義の矛盾
- 二 芥川の「苦力」への視線

おわりに

### 第五章 「北京日記抄」における政治的緊張と表現の制約——胡適会見の省略と検閲の影響

はじめに

- 一 日本の検閲制度と芥川作品
- 二 胡適との交流
- 三 胡適との会見回避

おわりに

## 第Ⅱ部 谷崎潤一郎の中国体験と中国像

はじめに

### 第六章 初の中国旅行をめぐる谷崎潤一郎の作品

はじめに

- 一 美食の享楽
- 二 カフェの享楽
- 三 観劇の享楽
- 四 風景の享楽——南京
- 五 風景の享楽——蘇州

おわりに

### 第七章 「秦淮の夜」における異邦人の孤独と無力感

はじめに

- 一 「秦淮の夜」における幻想の南京
- 二 「秦淮の夜」の構造と主題性
- 三 谷崎潤一郎における「表／裏」の空間

おわりに

## 第八章 「蘇州紀行」における抹消された地図——『朝鮮満洲支那案内』を手がかりに

はじめに

- 一 『朝鮮満洲支那案内』における制度化された観光表象
- 二 「蘇州紀行」における制度的旅行の枠組みからの逸脱

おわりに

## 第九章 「空白期間」をはさむ中国表象の変容——「上海交遊記」を手がかりに

はじめに

- 一 初訪中との対比——孤立から対話へ
- 二 「支那の悩み」と谷崎潤一郎の理解
- 三 中国に寄せられた西洋趣味

おわりに

## 結論

### 付録 芥川龍之介・谷崎潤一郎「私」の変容と同時期の日中状況比較表

本論文は、芥川龍之介の紀行文や小説、そして同時代の谷崎潤一郎の紀行文や小説を並置し、それぞれの作品群を時系列に配置して、共通する語り手概念を使うことで、個々の作品の中国表象とその変容を一元的にとらえようとするものである。それは、論者自身が「中国が固定的な「他者」として一方的に描かれていたのではなく、作者自身の旅の経験や現地との対話を通じて、語り手の変容とともに、中国が多様に再構成される「場」として立ち現れていたことが示された。」とまとめている。つまり、作者の評伝的な情報に支配されることを避けて、まず語り手の変容の様相を追及する。そのことで、「一方的に」「他者」として「描かれたのではなく」、作品群で表象された語り手の変容を根拠として、それらには「中国が多様に再構成される「場」として立ち現れる」のだとする。そこから、再度、説明としては作者という括りに向かうという手法である。

対象は、芥川龍之介の『支那遊記』（「上海遊記」・「江南遊記」・「長江遊記」・「北京日記抄」）、「首が落ちた話」・「湖南の扇」及び書簡、谷崎潤一郎の「支那劇を観る記」・「美食倶楽部」・「支那の料理」・「カフェー対お茶屋 女給対芸者」・「東京をおもふ」・「或る漂泊者の悌」・「秦淮の夜」・「蘇州紀行」・「上海見聞録」・「上海交遊記」・「友田と松永の話」・「人魚の嘆き」・「魔術師」・「陰翳礼賛」であり、小説と随筆等とをジャンルの区分を設定することなく対象としているが、小説については作品分析を踏まえている。

目的は、芥川龍之介及び谷崎潤一郎の「中国像」が従来「ステレオタイプ的な理解」であったとし、それに対して、本論では「文学的自己形成と異文化理解再考の枠組みを語り手のあり方から提示し」たとする。そして、「近代日本文学における文化的「越境」や知識人の自己形成という課題に」「示唆を与えるもの」と、本論の位置づけを述べている。

序論として、芥川龍之介と谷崎潤一郎が、中国古典の素養を持ち、かつ中国を訪れた作家であること、両者とも中国を舞台とする小説や中国に関する紀行文を書いていることから、この中国関連の作品群を研究対象にすることが述べられている。研究方法としては、中国に関連する作品群の分析を行い、各作品の語り手とその変容について考察を重ねることを取る。研究の目的としては、あえて、小説とその他の文章とのジャンルの差異を顧慮しないで、語り手として一元化し、そこに作者の中国観の変遷の根拠を見ようとするものである。

第一部は、芥川龍之介の中国体験と中国像に関する論考を集合させた部分である。

第一章「芥川の中国旅行と『支那遊記』への評価」では、日本と中国の先行研究を紹介しながら、中国での否定的な評価に対して、論者は懐疑的な立場をとる。ただ、この章は、第一部の序論の役割なのか、論者の問題意識の表明と、『支那遊記』の「非常に複雑な側面を持っている」という指摘にとどまる。

第二章は、「『魔都』上海の表象と芥川の第一印象」と題され、1921年の芥川龍之介の上海旅行を経て、中国認識の変化を、『支那遊記』の記述に求めている。その中の「婆さん」では貨幣論を用いて、その行動を読み、「当時の日本社会における経済的格差や貧困層の人々が抱える苦悩を描いたとする。そしてそこに、芥川による『経済的・社会的な問題を批判』があるというのだ。その他の箇所も取り上げながら、この章では、「列強に侵食された上海の実態を知るようになり、芥川の『西洋』に対する視点は変化」したという。さらに、「鄭孝胥氏」その他を取り上げて、中国の三人の知識人との談話によって、芥川は日本の中国侵略に対して「強い嫌悪感を抱いていた」という。ただ、そうした中国体験であっても、芥川の中国趣味を「揺るがすには至らなかった」と結ぶ。

第三章「江南体験と英雄像の変容——『首が落ちた話』『江南遊記』『湖南の扇』を軸に」は、芥川龍之介の中国体験による作品の中の「英雄」像の変化を検討している。芥川の『水滸伝』教養を前提として、『首が落ちた話』に語られた「何小二」には、「英雄」から「無頼漢」の転落があり、そこには「戦争を支える社会構造」『批判』があるという。また、芥川は、中国の現実と『水滸伝』との比較の中で、リーダーシップ論的なまなざしを中国に向けているとする。そして、「中国社会の底流に脈打つ『反骨のエネルギー』を見いだした」とした。それは、中国から帰国したのちに発表された小説『湖南の扇』での、「黄六一」像の「土匪」像と「英雄」像の二重性が、「近代中国の混沌を照射」するものであり、『首が落ちた話』『江南遊記』『湖南の扇』に語られていた「英雄」像の変容が、芥川自身の「中国認識が『古典的想像』から『現実的衝突』を経て『批評的再構築』へと深化する過程を鮮明に映し出している」という。

第四章は、『長江遊記』における下層階級の表象——『苦力』をめぐる視線の分析」と題され、まず、西洋の影響による中国の自文化に対する軽視を批判する芥川の視点を紹介している。そして、『廬山』の中の「中国人苦力」の語られかたに、芥川の「中国社会の最下層で働き、生活している人々に対する一種の『共感』を読む。この『苦力』の描かれかたについては、谷崎潤一郎や徳富蘇峰の紹介と比較しながら、芥川には「中国に対する西洋列強の搾取的態度と強制的な労働動員に対するアイロニカルな批判を表現していたのではないか」という。

第五章は、『北京日記抄』における政治的緊張と表現の制約——胡適会見の省略と検閲の影響」と題され、胡適との会見などの交流において、芥川が書いたものには、胡適の自由主義的な立場に必ずしも賛同していない

が、それには日本の検閲制度等が影響しているのではないかという。その結論に結びつく根拠として、日本の検閲制度とそれによって芥川の作品が実際に発禁になった事例を幾つも取り上げている。

第二部は、谷崎潤一郎の中国体験と中国像に関する論考を集合させた部分である。その「はじめに」で、谷崎潤一郎の二度の中国旅行を通じて、「いかなる「中国像」を抱き、それが彼の中国に関する文学作品の創作にどのような影響を与えたのか」という「問い」を「出発点」とするという。

第六章は、「初の中国旅行をめぐる谷崎潤一郎の作品」と題し、まず「支那の料理」と「美食倶楽部」を取り上げて、谷崎の料理に対する関心を指摘する。次に、「カフェー対お茶屋・女給対芸者」「東京をおもふ」を取り上げ、谷崎の「享楽志向」が、日本の社会制度への「批判」を含んでいるとする。また、中国の演劇に関する理解の深まりの中で、彼の「美的想像力」が「仮想的な「異国」を生みだしていたという。総じて、谷崎の「享乐的な視点」とする。

第七章は、「秦淮の夜」における異邦人の孤独と無力感」と題し、小説「秦淮」を、「異国という空間における「私」の無力、そして言語や文化の断絶によって生じる根源的な孤独を浮かび上がらせる小説作品」と位置付けている。特に、「旧都」としての南京を再構築していることに、その「南京の複雑な歴史が空間域に表現されている」という。「根源的な孤独」については、「異文化に対する近代的主体の認識の限界」を指摘し、「現実と幻想の間に存在する不可避な断絶」の存在に言及する。そこに谷崎が望んだ南京の姿があるという。

第八章「蘇州紀行」における抹消された地図——『朝鮮満州支那案内』を手がかりに」では、大正期の旅行ブームのなかで、鉄道院が発行した「朝鮮満州支那案内」を、「旅程の参考」にしながらか「蘇州紀行」を書いた谷崎が、どのように「再構成」したのかを検討している。谷崎は、「朝鮮満州支那案内」の「背後に潜む植民地主義的・政治的コンテクストをいかに批判的に再構成していたか」は、論者は「日常的な都市風景」に「関心」を向けて、「見ること」および「見せること」をめぐる帝国日本の言説構造に対し、「文学がいかなる批評的可能性を有し得たのかを考察する」という。「朝鮮満州支那案内」にみられる「制度的表象」に組み込まれた「政治的含意」や「地図の帝国主義的機能」を、具体例を通して説明し、そのことが、「生きた空間」を隠蔽するという。それに対して、谷崎の「蘇州紀行」は、「日常的風景」に組み換え、「反地図的」「視線」を向けるという。この比較によって、「帝国主義的視線」と「文学的視線」の「対抗関係」を提示している。

第九章「空白期間」をはさむ中国表象の変容——「上海交遊記」を手がかりに」では、谷崎の中国再訪による、「享楽主義」から「文明批判の視点」への変容を、中国知識人との直接的な対話によるものだと考察する。それを、「孤立」から「対話」と位置づけ、田漢や郭沫若らとの交流を文章や記録から辿り、谷崎が帝国主義に支配された現実の中国の社会文化状況への理解を深めていく様相をとらえる。そうして谷崎によって理解された上海を、論者は「魔性」を帯びた近代都市としての上海」とした。そして、こうした谷崎の異文化体験が、日本の文化を再発見していくことになったとする。

提出論文全体の総括として、「結論」では全体がまとめられていた。ここでは、芥川龍之介の作品においても、谷崎潤一郎の作品においても、「中国」が「経験」や「対話を通して」、「再構成」されたものであるとする。そのなかで、語られていることの変容は語り手の変容を示すものであり、それがそれぞれの作家の変化とつながり、彼らの「文学的自己の語り」に影響を与えたとしている。二人の「越境的知識人」の分析を通して、中国の現実や社会的な問題がどのように理解され、受け入れていったのかを明らかにする、ひとつの方法的な有効性を問うていた。

最後に、芥川龍之介と谷崎潤一郎の、中国にかかわる出来事や作品そしてそこでの語り手の特色が、背景となる日本の時代状況と共に、年表の形式でまとめられていた。

### 審査結果の要旨

芥川龍之介および谷崎潤一郎の研究は、従来から盛んである。とりわけ、二人の中国旅行と体験が創作にもたらした影響については、日中両国の研究者によって近年新しい資料や現地調査などを踏まえた研究が精力的に発表されており、飛躍的な発展が見られる。本論文は、二人を「越境的知識人」として並置し、中国体験を踏まえて彼らが個々の作品において語り手を通じて表象した中国イメージを分析する。それらの作品をジャンルの枠組を外して分析し、それらを時系列的に並べることで、そのイメージの変容の様態を取り出しているところに独自性が見られる。そして、その語りの変容が意味するものを検討し、さらにその変容が作家の思考内容に遡及していく、あるいは自意識に迫っていくところまで追跡して記述しようとする手続きは、これまでになかった方法である。

従来の考察では、中国旅行で得られた知見によって作家の認識が改まり、その影響が小説のテーマの変化として現われるというように、段階的に理解することが一般的であった。本論文では、「紀行」や「小説」といったジャンルの枠組にとらわれることなく、それらが語り手によって生み出された表現であり、たえず変容し、表現されたものが語り手自身の認識を組み直していく可能性をはらんでいるという観点に立っているところが新しい。論者の問題提起は、小説を中心的ジャンルに位置づけることが自明の前提とされている近代文学史を見直すきっかけにもなるものであろう。

作家が想像していた中国イメージと、彼らが直面した現実の中国の社会や文化の姿とに揺れ動くものとして、論者は、作品の語り手の視点のゆらぎに具体的に注目する。

芥川についての考察では、中国旅行を地域に分けて考察し、体験の多層的な影響を取り出そうとする論述が展開されている。共同租界地として、最も西洋化された場であった上海をめぐることは、多くの日本文学者的作品との比較検証を通じて、芥川の認識が複眼的である特色を持つことが指摘されている。江南地方での見聞に関しては、戦功のあった軍人や豪傑などを「英雄」視することを見直す意味があったことに注目し、その後の創作における人物形象の相対化につながっているという見解が提出されている。長江における体験では「苦力」に注がれるまなざしを取り上げられ、宗主国の感性から脱して、被抑圧者である労働者への共感が形成されていく過程が追跡されている。北京滞在中の体験については、胡適など要人との会見が重視されており、新しい体制へと生まれ変わろうとする中国への積極的な関心が生まれながらも、検閲を意識して明示的に考えを記さなかった事情が推察されている。中国の現在の状況を目の当たりにした芥川は、得られた知見を言語化する上で、文体も内容にふさわしいものに組み替えていった。事実か作りごとかはっきりしない語り口の導入、断片的な記述の集積、対話や記事など異種の文章の挿入などが、ジャンル混淆的な言語表現を狙った実例として挙げられている。

谷崎についての考察では、訪問前の中国に関する表象が谷崎の趣味に即するものであったことが、まず確認されている。「支那料理」の称賛や異国趣味への憧れは、自身の感覚的欲求を満たそうとする享乐的な志向で貫かれており、オリエンタリズム的なロマン主義の傾向が露わである。現実から遊離した嗜好が二度の中国旅行によって更新されることが本論文では検証されている。最初の旅行は、異国趣味で中国をとらえる偏りが修正されて

いく体験と意味づけることができ、紀行文であり、小説のようでもある「秦淮の夜」は、「私」が幻想空間を構築しようとしながらそれに失敗し、言語による意思疎通ができずに恐怖と無力とを感じる経緯を描いた作品として評価することができる。また、「蘇州紀行」については、旅の行程が同時代の旅行案内に対応していることが考証されている。谷崎に観光客の意識があったことは否定できないが、一方で「私」は案内にない場所も訪れており、帝国主義的な視線を反映した旅行案内に束縛されていない体験が言語化されているところに制度的な思考を逃れる可能性が認められる。二度目の旅において、谷崎は田漢や郭沫若ら若き知識人たちと交流しており、中国の置かれた政治的、社会的状況に触れることで異国趣味を語ることは、さらなる見直しを迫るものとなった。中国体験は、いわゆる「日本回帰」を促すきっかけにもなったが、日中関係が悪化したため、谷崎が新たな認識に基づいて中国について積極的に語ることはなかったと述べられている。

芥川龍之介の作品においては、「批判や社会告発」、谷崎潤一郎の作品においては、「幻想の崩壊」と「異国趣味」の「放棄」に比重が置かれた中国表象となっていることが指摘されており、二人の文学者の違いが明確化されている。それらは、語り手の揺らぎであると共に作家のゆらぎでもあると論者は主張する。こうした、語り手の変容から作者を説明するという方法は、評伝的な事実や既成のイメージに拘束されない書き手の像とその変化とを現出させている。また、作品群、とくに語りに対する中国近代史からの照射が、さらに新しい面を浮かび上がらせていた。

漢籍を通じて中国の古典に親しんできた日本の二人の文学者が、比較的長期間の旅行によって感性や認識を改め、言語表現も新しいものに組み直していったことを明らかにした本論文の意義は大きい。考察では二人を指して「越境的知識人」という言葉が用いられているが、「越境」は、国境だけでなく、表現のジャンルやイデオロギー上の境界を越えていくことも表している。異なりを見せながらも、中国について異国趣味的な像から現在の実情へと関心を移し、新しい表現を目指した軌跡において芥川と谷崎とが共通することを見出したのは、同時代のほかの文学者を検討する際にもすぐれた参照点となる。

論旨については概ね妥当なものであると考えられるが、用語の選択や論述については疑問がないわけではない。語り手を、脱ジャンルの共通概念とするよりは、差異も含めた概念として提出すべきではないかという指摘があった。「語り手」は通常小説で設定される虚構内の存在である。小説だけでなくさまざまな言語表現を作り出す主体を表す言葉としては必ずしも適当な語であるとは言えない。「私」という用語も多用されているが、作者を指すのか、一人称の語り手を指すのか、あるいはそのいずれをも含むのか、判然としないところは再検討の余地がある。

序論で明確に述べられていないため、論の目的が言説の変容をとらえること自体にあるのか、作家像の見直しをも含むものであるのか明確でないことも、改善が求められる点である。もし考察が作家研究に向かうならば、今後、さらに多くの手続き、資料調査が必要になろう。本論文では「明治」、「大正」といった元号による時代区分が採用されているが、日中知識人の交流と相互変化とを論じる本考察において適切かどうか、にわかに判断しがたい。さらに、「中国像」、「英雄」などの用語について、見直しが必要ではないかという指摘があった。二人の文学者がとらえたのは、一元化できない同時代の中国の多面的な姿であり、「中国像」という語は、国家像に単純化して理解されてしまう恐れがある。また、「英雄」は古典的概念においては単純なヒーローとは異なり、無規定に当てはめることで論述の精度を下げることは避けるべきであろう。

以上挙げたような説明や論証手続きに関する課題はあるものの、芥川龍之介と谷崎潤一郎とを相互に対照させ、中国体験がその後の創作活動全般に及ぼす影響をもたらすできごとであったことを詳細に考証したことは、

学術的な成果として評価できるものである。審査委員会は、2025年9月13日に、論文内容およびこれに関連する事項について公開審査の形で試問を行い、合格の水準に達していることを確認した。本論文について、審査委員会は、全員一致で「博士（文学）」の学位授与にふさわしいものであると判断する。

## 博士学位論文審査報告

題 目	太宰治文学の戦中戦後 一人物像の再定位を中心に		
氏 名	文学研究科 国文学専攻 宋 迪		
論文審査委員	主査	二松学舎大学大学院文学研究科教授	江藤 茂博
	副査	二松学舎大学大学院文学研究科教授	山口 直孝
	副査	二松学舎大学大学院文学研究科教授	五井 信
	副査	二松学舎大学大学院文学研究科教授	牧角 悦子

### 論文の目次と各章の概要

本論文は、太宰治の戦中戦後の作品である、『十二月八日』、『貨幣』、『ヴィヨンの妻』、『おさん』、『饗応夫人』、『桜桃』の6作品を取り上げて、各作品に、配置、表現された登場人物あるいは擬人化された登場物らが、登場する相互の関係性のなかで、それぞれの意味を変化転換させながら、新たな世界が生まれていく作品の様相を捉えた論考である。構成は、それぞれの作品の分析を各章に充てて、作品研究を並べた形式を採っている。そのために、序章、第一章～第六章(各作品の分析に各章を与える)、終章の全八章から成っている。

#### 1 目次

##### 序章

- 一 研究背景と問題意識
- 二 先行研究と本論の構成

##### 第一章 『十二月八日』－「日記」と「私」について

はじめに

- 一 「日記」による二重の「私」
  - 1 〈書かれた「私」〉
  - 2 〈書かれている「私」〉
- 二 「取捨選択」による評価の多様化
- 三 「言説」による夫婦像の変化

おわりに

##### 第二章 『貨幣』－「傍観者」の視点から

はじめに

- 一 「娼婦性」について
- 二 依存する存在としての「百円紙幣」
- 三 「恥」を語る「百円紙幣」

おわりに

### 第三章 『ヴィヨンの妻』における「夫婦関係」－「共依存」の視点から

はじめに

- 一 対等な「夫婦関係」の欠如
- 二 夫に必要とされることを必要とする妻
- 三 苦しめる根源から抜け出した妻

おわりに

### 第四章 『おさん』における夫婦関係－「戀」と「革命」について

はじめに

- 一 「夫」が語った「革命」
- 二 「私」が解釈した「夫」の「革命」
- 三 「革命」された「私」
  - 1 第一段落
  - 2 第二段落
  - 3 第三段落

おわりに

### 第五章 『饗応夫人』－「饗応」に至るまで

はじめに

- 一 「私」という存在
- 二 「私」の三つの側面
  - 1 「奥さま」にとっての「ウメちゃん」
  - 2 「お客」にとっての「ウメちゃん」
  - 3 「私」としての「ウメちゃん」
- 三 「私」としての「ウメちゃん」の「饗応」
- 四 「饗応」相手の転換

おわりに

### 第六章 『櫻桃』試論－障害者家族の視点から

はじめに

- 一 「夫婦喧嘩」の構図
- 二 「四歳の長男」と障害の可能性

### 三 障害者家族としての構造

- 1 障害者を言語化することの回避(「白痴」「唾」といえない「沈黙」)
- 2 育児負担をめぐる非対称性(父の逃避と母の過重負担)
- 3 破壊傾向(障害児を抱えた親の絶望感)

おわりに

### 終章

- 一 研究成果
- 二 課題と展望

目次の章立ての構成としては、章が作品論として独立しており、各章それぞれでの論全体のつながりに関する言及がない。そのために、独立した論の連鎖のように受け止めてしまうことになる。ただ、論者が特に言及しなくても、登場人物等の関係性に、全体として関心が向けられていることは、読み取ることができるものであることは、補足しておきたい。

## 2 各章の概要

### 第一章 『十二月八日』－「日記」と「私」について

論者は、「〈書かれた「私」〉と〈書いている「私」〉という二重化された位置に置かれた存在を取り上げ、判断や態度が直接表明されない語りの構造を分析」したとする。

まず、「〈書いている「私」〉」は、「読者を意識しながら〈書かれた「私」〉を「日記」を通して作り上げた」とし、この「二つの異なる審級の「私」」に注目する。そして、「書いている「私」」の、「出来事」を「選別」「整理」することによる「一日という固有の時間」が「取捨選択」されていることを指摘した。そして、そこに「〈書いている「私」〉の戦争に対する意識が窺える」とした。つまり、その「「主人」の皇紀や戦時体制などを揶揄する可能性のある出来事を「取捨選択」したために、「戦争に対する意識の曖昧さが生じ」たとする。具体的には、「主人」を「無知」とすることで、「皇紀や戦時体制などを揶揄する可能性を持つ出来事」を「ごまかしている」と捉える。それは、「〈書いている「私」〉が「主人」を守ろうとする志向」の表れだと指摘した。そのことが、従来の夫婦像とは別の姿が生まれていたとするのである。

### 第二章 「貨幣」－傍観者の視点から

論者は、『貨幣』の百円紙幣を、出来事を動かす主体ではなく、傍観しつつ通過する存在として捉え、非行為的立場が成立させる倫理的判断の可能性を検討」したとする。

この『貨幣』である「私」は、「常に他者の行為に巻き込まれ、その結果として生じた出来事を後から振り返る形式」に注目し、ここにある「行為不能性や人間への依存性」を「検討」しようというものである。この「語り」の在り方から、「人間に依存しつつ人間社会の出来事に立ち会い続ける「傍観者」の視点から読み直す」ものであるとする。そして、「百円紙幣が、ときに人間に対して倫理的な言葉を発する点」を指摘した。

先行研究のなかでも「娼婦性」という概念では「百円紙幣」を十分に説明できないのではないかという問いから、「語り手である紙幣の存在様態そのものに目を向けることで」、その紙幣の「行為しない存在」「依存する存

在」とみて、その「語り」がどのように成立しているのかを問い直す」という。その結果、「百円紙幣の語り」に「徹底した非行為性」を見出した。それは、「流通と欲望に依存し続ける存在」を示し、そのために「出来事から距離をもって見つめ、語る位置に立つことが可能になった」という。そして、「百円紙幣の語り」が経験の集積を通して倫理性を帯びる」ために、その「語り」は、「恥」を語るとする。

「百円紙幣」の語りの独自性を、「非行為性」「依存構造」「恥」を語る可能性」とし、「娼婦性」では明らかにできない、「行為を行わない存在が倫理的評価や判断を可能にすること、その語りの位置が戦後社会の人間関係や欲望の可視化に重要な役割を果たす」とした。そこには、『貨幣』を「人間の欲望・倫理・判断を記録する語りとして再評価される」作品と位置付けた。

### 第三章 「ヴィヨンの妻」における「夫婦関係」－「共依存」の視点から

論者は、『ヴィヨンの妻』において、依存する夫を支える側に回る妻という存在を通して、「共依存」的關係の構造を明らかにし、妻のそこからの「脱却」を指摘する。

従来の研究にあるような、大谷にとっての「聖母性」や「許し」を妻に見るのではなく、大谷に「迎合」し、「依存」する、その「共依存」を確認し。そして、妻が、その「共依存」からいわば脱却あるいは転倒させて、「妻が献身を通して自らの存在意義を見出している心理を明らかにした」とする。

### 第四章 太宰治『おさん』における夫婦関係－「戀」と「革命」について

論者は、『おさん』における妻の語りに着目し、夫の死という行為の意味を引き受け、生き続ける側に委ねられた位置を分析したとする。

「私」は「夫」の「革命」を理解できないものとしながら、それまでの「従属」から「自立的に行動する主動性を持つ主体へと変化している」ことを指摘している。妻と夫との関係、妻の夫理解の変化が、作品の展開にそって三段階で指摘され、さらに夫の自殺によって「私」は「夫」によって呆れ、否定し、そのことで「内面的な成長」が促され、「生きとおす」ことになる。夫の自死という革命と、私の新たな価値への革命が描かれているとする。

### 第五章 太宰治『饗応夫人』－「饗応」に至るまで

論者は、『饗応夫人』における女中の「私」を中心に、「奥さま」との関係の内部で連鎖的に生成する「饗応」行為の理由を示したとする。

特に、登場人物「ウメちゃん」の「三つの側面」（「奥さまにとってのウメちゃん」「お客にとってのウメちゃん」「私」としてのウメちゃん）を捉えて、多様な「私」であるウメちゃんが、「私」としてのウメちゃんとして、「奥さま」を「饗応」するまでの推移と、田舎に帰る切符を引き裂くことをきっかけに、ウメちゃんが「奥さま」と同じく客を「饗応」する立場に変わる。これは、「奥さま」を「饗応」することで行き着いた、ウメちゃんと「奥さま」の重なりと読んでいる。つまり、「奥さま」を「饗応」することが「客」を「饗応」することになるという。

### 第六章 『桜桃』詩論－障害者家族の視点から

論者は、『櫻桃』において、障害の可能性を示唆される子どもを抱えながら判断を回避し続ける親の存在に注目し、家庭内関係の構造を明らかにした」とする。

私である「父」はなにもしない。妻は、ひたすら家族を支えている。しかし、「父」の思いは書かれてあるが、実際、何もしない。そして家庭で起きる夫婦喧嘩の原因は、何もしない父親が父親失格であることによる。特に夫婦の間の「沈黙」という、「心理的な苦痛を回避する」方法がここにあると指摘し、障害者の子を持つ家族の構造を見る。この「沈黙」は、夫婦の間の「共感の不全」、「断絶」、「非対称性」を示し、そこからの「持続的な緊張」がそこには存在するという。それが言語化されないまま「家族の内部に生じる緊張や負担、また責任の所在をめぐる不安定さ」が描かれた作品とされている。

## 二 各章の課題と評価

第一章では、語りの構図を使うための前提については、既存の理論等を使ったわかりやすい説明が必要ではないか。主婦の語りであることの意味を検討する必要はないか。読み手が想定される日記体であること的位置づけとして、登場する書き手とその書き手が書いたこととの関係(日記体)と、登場する語り手とその語り手が語ったこと(登場人物の語り体)との、構造的な関係性の異同で説明したらよいのではないだろうか。そうであっても、日記体小説としての表現構造に注目し、従来の戦争に関する肯定否定意識の有無ではなく、〈書いている「私」〉の「主人」を守ろうとしている作品とした点が、研究史上の新たな知見をもたらしていると考えられる。

第二章では、登場する貨幣や紙幣としてではなく、「百円紙幣」と擬人的な存在について、それを使用する人間との共依存性についても言及すれば、他の章での論考分析とも結びつくのではないだろうか。また、20世紀末からの、いわゆる「貨幣論」と結びつけた論考として成立させてもよかったのではないかと思う。そうは思うものの、分析の方法として、従来の「娼婦性」という視座を、「百円紙幣」の語りのあり方から否定し、「徹底した非行為性」に着目し、そこに「倫理性」を見出した点に、新しさがあった。

第三章では、構造分析の指摘として提出された「共依存」は、特に新たな視点を生むものではなく、その概念を使うことで示される作品解読を提示すべきではなかったか。ただ、妻の存在を、「共依存」という概念を与えることで、先行研究における聖母性という解釈から解放することができ、自らの「存在意義」としての「献身」という新たな視点を得ることができた。

第四章では、夫の自殺が妻の「内面的な成長」と結びつくことが、一般論としては理解できるが、この作品では、単なる批判や悲しみの表明としても読むこともできるのではないだろうか。やや読みの根拠を提示するのに説得力が不足しているのではないか。しかし、夫の自覚的な妻の成長のための自殺という新たな視点が示されたことを評価したい。

第五章では、疑似家族関係に対する歴史的な視点が欠如している。「女中」の文化史への理解、近代日本の「奉公」の意味付けを行う必要があるのではないか。交換や贈与に関する緒論の成果を取り入れてもよかったのではないか。評価すべき点としては、「饗応」を固定的な概念とすることなく、登場人物の行為行動の推移に、各段階での「饗応」を位置付け、特に「ウメちゃん」の「奥さま」との合一化と、そこからはみ出すものを指摘

したこと、そこから新しい視点として、「ウメちゃん」の間接的な「饗応」現象を、あらたな知見として、提出することができたことが挙げられる。

第六章では、登場人物が障害者である可能性は読み取れるが、そのことがどのような意味を持つのかについては、根拠となる作中表現はやや乏しいのではないかと。そうでありながら、「沈黙」「回避」「断絶」といった場面に、論者の意味付与があり、やや過剰ではないかと思う。厳しくいうと、作中人物の行為の「分析」というよりも「説明」の域を脱しておらず、「文学研究」としてはやや不満が残る。社会的な環境から十分に論議されてこなかった「障害」を持つ「子ども」に視点を向けて、テキストを読み直した点は評価できるので、さらに研究のレベルでの解説に向かってもraitたい。

### 審査結果の要旨

太宰治に関する研究は、伝記的な調査、作家研究及び作品分析等が重ねられ、先行研究を辿るだけでも、相当な労力が必要である。しかし、提出された論考には、それらを確認した痕跡が見られた。まず、太宰治研究への挑戦の意思と先行研究を細かに掘り起こした努力には敬意を払いたい。

さて、各章の個別的な評価は先に記したので、全体的な評価と問題点、そして審査の結果について記すことにする。この研究の方法としては、語り手や主人公の性別や物語内容で系列化されていた太宰治の作品を依存や従属など関係の下位に置かれる存在に注目していることが新しい。対象とした作品の組み合わせが従来になく、語る行為によって関係性が更新され、能動的な主体性が生み出されていく経緯を内在的な分析によって解明しているところに独創性が認められる。意志的な選択による共依存関係の再構築というモチーフが、太宰の作品で戦中から戦後にかけて一貫して現われていることを提示した意義は大きい。

そして、男性—女性の非対称的な関係として、半ば実体的に理解されてきた構図を、性にとらわれない関係性においてとらえたことは、家族の概念の見直しを迫るものであり、太宰治研究に新しい知見をもたらす可能性を持つ。

全体的な問題点としては、審査担当者から真摯な意見が提出された。それらをここに並べることにする。それは、問題点や今後の課題として指摘された事柄から、この論考の特質が浮かび上がるからでもある。

各章が各論としてまとめられている、いわば作品論としての方法についてである。主人公が語ることによって生じる自意識および関係の変化を記述するため、作品論として閉じる必要があるのは理解できるが、太宰の他作品との関連や構造の比較はあってよい。語ることと書くこととの区別は意識されているが、受け手のありようや語る目的などによる言説の異なりへの目配りは十分ではなく、時としてストーリーの確認であるかのような記述になっていることに不満が残る。作品形式について、物語論の成果を参照して、枠組の機能や語りの多層性の効果をより明晰に整理していくことが望まれる。

戦時下における貨幣価値の変化や敗戦後における女中の社会的地位など、同時代状況への関心が全体的に稀薄なことは惜しまれる。主体的な共依存関係の構築を形象化した太宰治の先駆性は、歴史的な脈に置くことでいっそう浮かび上がるであろう。

先行研究を広く収集し、それらの成果を自分の論に落とし込み、また批判的に取り入れている点は大いに評価したい。ただ同時にそのような論文構成が、それぞれの論のスケールを小さくさせている点は自覚してほしい。つまり、先行研究に対して幾分かの修正を加えるという域に止まっているように見える、ということだ。もちろん日本語母語者ではないという不利な点はあるのだろうが、新しい文学理論や現代思想、また歴史に対して目配りをしてほしい。活字化に向けて再考する際に、検討してほしいことである。審査対象者の能力からすれば、けっして無理な要求ではないと信じる。

以上挙げたような論の方法や構成について課題が指摘されるものの、作品論としての枠にとどまったことで、太宰治の各作品にあらたな視点を向けたことは確かである。この方法で見出した関係性というものを対象化し、再定位するという視座を、審査委員会は学術的な成果として評価できるとする。審査委員会は、2026年2月19日に、論文内容およびこれに関連する事項について公開審査の形で試問を行い、合格の水準に達していることを確認した。本論文について、審査委員会は、全員一致で「博士（文学）」の学位授与にふさわしいものであると判断する。

# 博士學位論文要旨集

内容の要旨および審査の結果の要旨

第 29 集

2026（令和 8）年 3 月 17 日

発行 二松学舎大学大学院

編集 二松学舎大学 教学事務部 教務課

〒102-8336 東京都千代田区三番町 6 番地 16

電話 03-3261-7406